

陥凹型早期胃癌の内視鏡学的・病理組織学的研究

著者	白根 昭男
号	813
発行年	1973
URL	http://hdl.handle.net/10097/19094

氏 名（本籍）	しら 白	ね 根	あき 昭	お 男
学 位 の 種 類	医	学	博	士
学 位 記 番 号	医	第	8 1 3	号
学位授与年月日	昭 和 4 8 年 7 月 1 1 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
最 終 学 歴	昭和 4 0 年 3 月 2 0 日 岩手医科大学卒業			
学 位 論 文 題 目	陥凹型早期胃癌の内視鏡学的・病理組織学的 研究			

（主 査）

論文審査委員 教授 山 形 徹 一 教授 笹 野 伸 昭

教授 斎 藤 達 雄

論文内容要旨

I はじめに

陥凹型早期胃癌における潰瘍所見（以下Ⅲと略記する）は、経過によって変動する事がしばしば認められる。最近、悪性サイクルの概念が提唱されてから、Ⅲの変動を悪性サイクルの一断面として捉えようとする試みがあるが、Ⅲの変動がすべて悪性サイクルで説明されるものではなく、また、どのような病巣が悪性サイクルをとるか、また悪性サイクルをとる胃癌ととらない胃癌との相違も未だ十分に解明されてはいない。私はⅡc内のⅢの変動に着目し、Ⅲをもつ胃癌ともたない胃癌との間には、どのような病態生理学的な相違があるかを検討した。また、ⅡcのなかのⅢと、癌巣内の潰瘍および瘢痕がどの程度一致するか、粘膜ひだの集中像はⅡc内の潰瘍および潰瘍癌根とどの様な関係を有するかも同時に検討した。

II 対象および方法

〔A〕 対 象

当科で診断してから外科で手術を行なった昭和35年から同46年迄の早期胃癌症例310例のうちから陥凹型早期胃癌190例、199病巣について検討したが、男子145例、女子54例、年齢は50才代にピークが認められ20代から30代に分布している。型別分類では、Ⅲ+Ⅱc 9例、Ⅱc+Ⅲ 51例、Ⅱc 112例、Ⅱc+Ⅱa 7例、Ⅱa+Ⅱc 20例であった。

〔B〕 方 法

病巣の内視鏡所見は観察時の記載と胃カメラおよびGTF-系ファイバースコープによる撮影フィルムから検討した。切除胃の肉眼標本の検討には、新鮮標本、半固定標本、症例によっては完全固定標本を用いた。199例の陥凹型早期胃癌を、手術時の肉眼所見と内視鏡による経過から6群に分類して検討した。組織標本は全病巣を含む3～5mm巾の連続切片より作製し、潰瘍の深さは村上の分類、癌組織型は胃癌組織分類委員会の分類を用いた。昭和40年以前の症例ではKatsch-Kal法による胃液酸度を検討し、41年以降の症例ではGastrinまたはHistalog刺激による酸分泌能の検討を行なった。

III 成績および結論

- 1) 手術迄の経過観察中にⅢが見られたものは80病変あり、このうち悪性サイクルと考えられたものは15病変であった。
- 2) Ⅲを内視鏡所見および肉眼標本で認めた病変の90%には組織学的に潰瘍癌根を認めた。

潰瘍，潰瘍瘢痕（以下 u1 と略記）のないものは，8%であった。

3) III の全く見られなかった 91 病変に，u1 をみとめた。

4) 粘膜ひだの集中像と u1 とは 80% 程度に一致する。

5) 病巣内に潰瘍のある癌，u1(+)群は比較的若年者に多く，胃体下部に好発し，未分化型癌が多く，酸分泌能も高い。これに対して u1(-)群は高齢者で，胃前庭部に好発し，分化型癌が多く，酸分泌能は低い。

6) 以上の結果から，u1(+)の IIc，IIc + III，III + IIc は一連のもので，病態生理的にも一つの共通性を有していると考えられた。粘膜ひだの集中像は 80% 程度これを診断する手がかりになると考えられる。

審 査 結 果 の 要 旨

陥凹型早期胃癌における潰瘍所見（以下Ⅲと略記する）は，経過によって変動する事がしばしば認められるので，著者は陥凹型早期胃癌190例，199病巣について検討して次の成績を得ている。1)手術迄の経過観察中にⅢが見られたものは80病変あり，このうち悪性サイクルと考えられたものは15病変であった。2)Ⅲを内視鏡所見および肉眼標本で認めた病変の90%には組織学的に潰瘍瘢痕を認めた。3)Ⅲの全く見られなかった91病変に潰瘍(U1)をみとめた。4)粘膜ひだの集中像とU1とは80%程度に一致している。すなわちU1(+)のⅡc,Ⅱc+Ⅲ,Ⅲ+Ⅱcは一連のもので，病態生理的にも一つの共通性を有していると考えられ，粘膜ひだの集中像は80%程度これを診断する手がかりになると考えられる。

したがって，本論文は学位を授与するに値するものと認める。